宇田川
準一譯

小學讀本

五

洋学文庫
文庫8
B 76
4

宇田川準一譯
小笠原東陽校

小學讀本

巻五

文學社藏版

文學社刊行

39-8125

小學讀本巻之五

宇田川準一　譯
小笠原東陽　校

第三

汝爰に來れ、○汝は、先日失ひさる書物を、見出したりや、○否、未だ、これを見出さず、○汝は、机と文庫の中を、搜したりや、○然り、既に、搜したれども、其中にも、あらざり、○然らば、尚ほ能く、搜すべし、○汝は、筆を、何處に置きたりや、○筆は、君の命じたる如く、机の上に、置きたり、○汝は、筆を、使ひたる

ことありや○慰みゝは、用ひたれども、其他ゝ、使ひたることなし、○然らば、字を書くときの、使ひ方を、教ふべし、○汝も、遊歩場ゝて、遊ばざりしや、○今日は、朋友に、出逢はざりしや、○否、われと、出逢ひたり、○彼は、何處ゝ居たりや、○彼は、遊歩場に居さり、○其他の童子等も、居たりや、○然り、數多の童子、遊び居さり、○彼等は、何を爲して、居さりや、

○或る童子は、球を擲ち、或る童子は、紙鳶を揚げて、遊び居されども、吾は、暫く、之を見て、歸り來れり、○能く、早く、歸りたり、速に、汝の席に行き、勉めて、書物を讀み、又、筆の使ひ方を、習ふべし、

第四

汝も、前きに、一人の童子と、一匹の牛とを、見たりと云へり、○汝は、其童子の名を、知れりや、○否、吾は、之を知らず、○彼は、牛を追ひ行けりや、又、牛を導けりや、○否、彼は、牛に乘りて、行けり、○其牛ハ、馴れて柔和なりしや、○然り、牛は、童子を乘せて、

徐に行きしゆへ、馴れて柔和なるものと思ふ
り、○童子は、牛の角を握れりや、○否、彼の體は、尚
ほ小なれバ、縱令、其手を伸ばすとも、之を握るこ
と、能はず、○汝も、亦、其牛
に、乘りしことありや、○
然り、曾て、之に乘りさり、
○其時、牛は、速く歩みた
りや、○徐に、歩みたり、○
汝の母は、汝が、再び牛に
乘ることを、欲せるや、○

吾は、これを知らざるなり、○夫れ牛は、人力を助
くる爲めに、使ふべきものなれど、其使はざる間
は、之を休息せしむべし、○戯れに乘りて、徒らに、
之を勞らしむること勿れ、

第五

此二人の童子も、三艘の船ゥ、港に入り來るを、見
居まり、○此船も、皆、其帆を、十分ふ掛けて、檣の頂
上ふ、旗を揚げたり、○一人の童子も、他の童子ふ
向ひて、曰ふ、彼船は、相續きて、入り來る狀も、愉快
ふらずやと、○他の童子、曰く、然り、甚ぞ愉快なり、

吾は、此の如く、三艘の船の同時に、入港せるを、未ざ見たることなし、○吾も、嚮に、彼地に赴きたる、汝の朋友も、必ず、此三艘の中に、乘り組みて、歸りたりと、想ふ、汝も、如何に、想ふや、○吾も亦、然るべしと、想へり、○彼も、家に在らざること、もはや一年に及びさるゆへ、今、果して、歸り來りおむ、其兩親は、彼に逢ふことを、喜ぶべく、彼も亦、兩親に、對面することを、樂み居るべし、○我等は、彼の、家に、歸りて、休息したる、日を待ち、其家を、訪ひて、恙なきを賀し、又、彼地に、於て、其見聞したる、總ての

事を、聞くを、樂むなり、○凡そ、海を、航るは、如何に、善き、大なる、船にても、或は、暴風、大雨等の、爲めに、波の、高く、起るに、逢ひて、危きことあれども、彼等は、幸に、恙なく、歸り來たるなり、○然らば、何故に、海を、航りて、遠き、外國へ、行く、人ありや、○其人等は、皆、彼地の、人と、貿易を、爲して、便益なる、品物を、

持ち歸り、又ハ、學問を爲して、智識を增さんが爲めなり、

第六

此圖ハ、兄と妹との、對話をる所ふり、○妹ハ、先きよ、劇しき風邪よ罹りて、殆と聾となりたるゆへ、大音ゐ、語るに非れバ、兄の曰へる言よても、聞きゑること能ハず、○兄ハ、妹に向ひて曰ふ、汝の、新しき書物を、吾よ借るべきやと、○妹ハ、其言を能く聞き得ざりしゆへ、尚ほ、兄に向ひて、君ハ、今何を云へりやと、○此時、兄ハ、再び、大音よて、汝の、新

しき書物を、吾に借るべきやと、云へり、○妹ハ、こを聞き得て曰ふ、其書物ハ、客室の、書物箱よ、入れ置きたるゆへ、直ちに出し來りて、呈るべしと、○是よ於て、兄ハ、妹の出し來りたる書物を借り、全く讀み了りて、後、妹よ向ひ、彼書物ハ、書齋れ机の上に置きたりと、○妹ハ、此時も、亦、能く聞き得ず、

て、君ハ、今何處ゝ置くと云へりやと、其言を聽き反せり、○兄ハ、又、大音ゝて、徐ゝ、前の言を、反復せり、○兄ハ善き人ゝして、妹を愛するゆへに、深く其聲を悶えて、其重聽なるを、更ゝ怒ることなし、○凡そ、人たるものた、總て、此の如き、不具の人ゝ逢ふときも、能く之を、愍みて、一層、親切を盡さざるべからざるなり、

第七

此鳥も、嬰ふり、○總て、鳥の嘴形ハ、種々ゝして、大なるものと、小なるものと、狹くして長きものと、廣くして短きものとあり、○鳥も、皆、此嘴ゝて、食物を啄むものなり、○鳥の中ゝは、穀類菓實類を、食するものと、蔬菜を食するものと、虫類魚類を食するものと、又、彼此を、併食するものとあり、○鳥の眼ハ、頭ゝ兩側ゝあるゆへに、同時ゝ、兩方を見ることを、得るなり、○又、鳥の中には、始終陸地に住まずして、概ね、水上に游き居るものあり、鴨、鵜、鷺、鷗等の如きもの、是なり、○鳥にハ、

飛ぶべき翼と、歩みて餌を拾り、又は、地を掘り、樹に上るべき足とあり、○鷲ハ、其足を用ひ、餌を攫みて、これを裂き、雞も、其足を用ひ、地を掘りて、種子、或ハ虫を搜し、又啄木鳥ハ、容易く、樹木を上下し、其皮にある、小さき穴を搜して、其中の虫を食するなり、○鳥の足ハ、大抵、四本の指あり、其三本ハ前にありて、一本ハ後にあれども、啄木鳥の足ハ、前後に、各二本の指あり、

第八

此童子は、其飼犬を伴ひて、爰ふ來まり、○彼ハ、其犬を能く飼ふや、○此犬は、彼の顔を瞰めて、尾を搖かせり、○其尾を搖りすハ、何故ぞりや○彼は、此童子を見ることを、喜べりや、○然り、犬は、喜ぶとき、其尾を搖かすものなり、此童子を見ることを、喜べるのみならず、相隨ひて、行くことを好めり、○童子、汝ハ、心を用ひて、此犬を、能く飼ふや、犬を引き隨ひて、遊歩

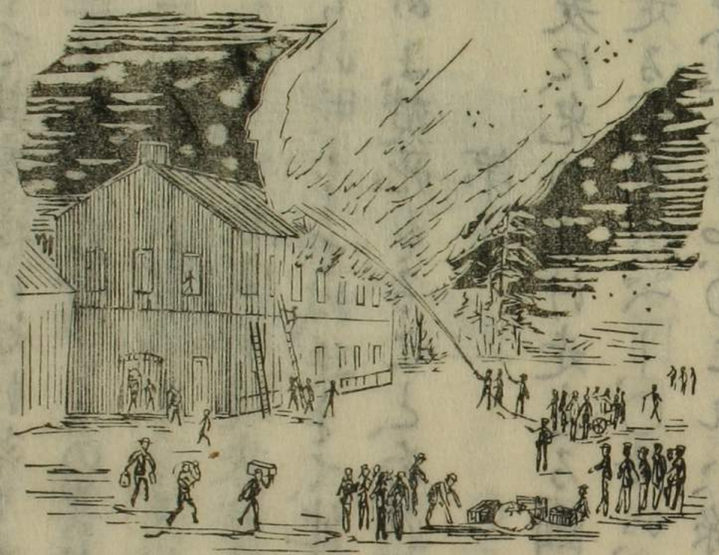
せりや、又彼の頭を、輕く拍つことありや、○此童子ハ、犬を拍つことあるとき、彼を、平常、能く飼れることを、喜べるゆへ、決して、童子を嚙むことなく、却りて、尾を搖かせべし、○童子、汝ハ、飼ひ養ひたる犬を、見ることを、好めりや、○然り、甚だ之を好めり、○汝は、常に、鞭を以て、飼犬を撻つことを欲せるや、○否、吾ハ、これを欲せざるなり、

第九

此人は、何の爲めに、爰に、止れりや、○彼は、何を瞰め居るや、又、何を考へ居るや、○此人は、久しき以前に、家を出でゝ、遠方に行き、今、歸り來るに、前に、住みたる家は、唯、壁の一部分と、壞れさる門とのみ殘り、其周圍に、雜草ぞ繁り蔓りて、頗る荒またる、狀あるを見て、驚き悲めるなり、○此人の家は、何の爲めに、此の如く、荒またるや、○今、汝に、其故を、話すべし、○此人は、妻子を、殘して、遠方へ、行きた

るよ、其一人は童子も平常惡しき戯れを爲せものふして、或る日、紙片を、火鉢の中に入れ、之を燃して、遊び居たるに、火屑、飜れて、圖らず、其衣服を焦がし、又戸より燃え移りて、終に、此家を燒失せしめたるなり、○是に由りて、此人、今歸り來れるも、既に、其家を見ること能はず、尚ほ、一時、其妻子の居所を、知り得ずして、歎き患ふれども、終に、こゝを尋ね出ることを得べし、

爰に、此人の家の、燃燒せし時の狀を、示せる圖あり、○汝は、烟と、焔が、家根と、窓より、噴出せるを見



るや、○又、其家に、寄せ掛けたる、幾個の梯を見るや、○吾は、長き梯と、短き梯との、二本を見る、○人々の、働ける狀を見よ、○或る人は、梯に上りて、撲滅せんとし、或る人は、水を注ぎて、消熄せんとすれども、火勢、益々熾んに

して、其家遂に、燒け落ちたるなり、○凡そ、童子ハ、種々の遊びを、爲ともなれども、火を用ひて遊ぶことは、甚だ宜しからず○若し、これを爲すときは、過ちて、其家を、燒失せしむることあるのみならず、時として、延きて、他人の家を燒き、人も亦、爲めに、焚死することあれば、ふり、

第十

爰に、兎の、逃げ走る圖あり、○此兎の、甚だ速く走る、見るべし、○汝ハ、此童子の傍らに在る、箱を見たりや、○これハ、絲蹄にして、其前に、機にて開閉すべき、蓋あり、○汝ハ、其機蓋を、見たりや、○汝ハ、此絲蹄を、何の爲めに用ひるものと、思ふや、

○これハ、野兎を捕ふる爲めのものなり、○此童子ハ、如何して、兎を捕へたるや、○此童子は、絲蹄の機蓋を、引きて、上へ開き、小さき棒を以て、これを撐へ、其棒の他端に、一個の林檎を結び着けて、其身は、それより、遠く

離れ潜みて、兎の罹るを、竢ち居たり、○既にして、小兎も、老樹の下の、穴より出で、食物を搜し、料らず箱の中に、林檎のあるを見さり、○兎は、之を、絲蹄と思はざりしゆへ、其林檎を食はんとして、徐ふ、箱中に這ひ入りされども、僅に之を嚙るや、其機蓋直きに、滑り下りて、兎を閉ぢ籠めさり、○此箱ハ、堅固よして、破るゝことなく、兎ハ、其機蓋を、上け開くことを、知らざれバ、竟に、逃るゝこと、能ゝず、○彼童子も、絲蹄を見んとして、近寄り、來りしに、其蓋の落ち居さるを見、喜びて、曰ふ、絲蹄落ちたり、絲

蹄落ちさりと、○斯くて、童子は、兎を見んとして、少しく其蓋を、上ぐるや、兎も、直きに其間より、頭を出し、力を盡し、蓋を押し上げて、逸足ふ逃げ去さり、○汝ハ、彼童子の、手を伸バせしを、見さりや、○彼ハ、其兎を、捕へ得しや、○否、兎も、速く走りされば、之を捕ふること、能ゝざりし、○其兎を、再び、此絲蹄ふ、罹るべきや、○否、再び罹ることなかるべし、○此童子ハ、兎を捕へて、如何せんとそるや、○彼は、家ふ持ち歸りて、飼ひ馴らさんとす、○飼兎は、數多の種類ありて、皆、野兎より大なり、野兎ハ、

飼ふとも馴らし得難きものなり、

第十一

これハ、何を示せる圖なりや、○これハ童子が、牛を牽きて、牧場ゟ行く所ふり、○此牛ハ、柔和ふりや、○然り、甚だ柔和なるゆへ、能く童子ゟ、隨ひて行けり、○此童子ハ、何を瞰むる所なりや、○此童子ハ、書物を讀むことを好みて、牧場ゟ行く途中ゟても、歩みふがら、これを瞰むる所なり、○此童子の、左手に持てるものハ、何なりや、○それハ杖ふり、○何故ゟ、杖を曳かぞして、持ち行けるや、

書物を、兩手ゟて、開き見んの、爲めふり、○汝ハ、此童子の、肩ゟ掛けさるものを、何なりと思ふや、○吾は、書物を入るゝ爲めに、小さき袋ふりと、思ふ、○此の如く、性質善良ふる童子ハ、怠らずして、勉強をるゆへ、終ゟは、必ず、富貴ハ身と成りて、幸福を受くることを、得べし、

第十二

雲雀あり、穀物を植ゑたる、畑の中に、巣を造りて、雛を孵したるに、其翼未だ十分に長ぜざるして、遠く飛ぶこと、能たざるとき、穀物ハ、已ふ熟〳〵さり、親鳥ハ、此穀物を、苅り取られんことを慮りて、食物を、索むる爲めに、出で行くゝ方り、其雛ふ向ひて、若し、此畑主の農夫、來りふバ、汝等、能く耳を欹て、彼の話したることを、聽き置くべしと、云へり、斯くて、親鳥歸り來りけれバ、雛告げて曰く、先刻、農夫の父子來りて、明日ハ、近隣の人を賴み、共に、此穀

物を、苅り取るべしと、相話せりと、

親鳥、これを聞きて、凡そ、事を爲さんとするゝ、他の助けを借らんとする者ハ、急ゝ、其事を爲すこと、能たざる道理なるゝ、彼等、今、近隣の人を賴みて、此穀物を、苅り取らんと、爲すこと、能たざるゆへ、明日

た、憂ふるよ足らず、尚ほ、暫く、此處よ、止まることを得べーと、云へり、

翌日、親鳥ハ、又、雛ふ向ひ、昨日ハ如き命令を下ーて、後、食物を、索むる爲めよ、出で行けり、

斯くて、又、親鳥歸り來りけれバ、雛又、告げて曰ふ、今日も、亦、農夫の、父子來りーご、近隣の人た、故障ありと見へて、一人も來らざりけれバ、彼等兩人よて、苅り取らず、明日ハ、朋友と、親族とを、賴み來りて、苅るべーとて、歸り去りと、

親鳥これを聞きて、彼等ハ、尚ほ、他人の力を、藉らんとするや、彼等た、朋友と、親族とを、賴まんと、思ふや、彼等、尚ほ、他人の手を、藉らんとならバ、我等ハ、尚ほ、暫く、此處よ、止まることを、得べーと、云へり、

其翌日、親鳥、又、雛ふ、例の命令を、下ーて、出で行き、食物を、索めて、歸り來りけるとき、雛、又、告げて曰ふ、今日も、農夫の父子、來りーに、其朋友も、親族も、來らざりーかバ、兩人、奮ひて曰く、最早、他人の手を、待つべからず、明日は、早朝より、自ら、之を、苅り取らんとて、歸り去れりと、

親鳥、これを、聞きて、されバ、我等の、立ち去るべき、

時節來りたるなり、彼農夫等、既ニ心を自ら苅ル
ニ決シたらば、明日、必ず來り苅るべシと云へり、」
其翌朝、親鳥、雛を伴ひて、此畑を、立去ると齊しく、
彼農夫等、果して來りて、忽ち穀物を苅り盡した
り、親鳥の言、實ニ能く當たりと謂ふべきなり、

第十三

花園ニ善き種子を蒔くハ、後日、愛らしき草木を、
生ぜしめ、美しき花を開かしめんが爲めなり、○然
るに、雜草を、此園中ニ蔓らしむるハ、善き種子
を害して、其生長を、妨ぐるゆへ務めて、これを鋤

き、取らざるべからず、
人ニ於ても、これと同じく、彼童子等の、學校ニ行
くときは、勉強して、其日課を學ばざるべからず、
○學校にて、教師の教ふる所の事ハ、皆、童子等の、
心の中に、蒔きさる、善良の種子ニ等しけれど、能
く心を用ひて、これを長育成熟せしむべく、又、其
心の中ニ生ずる惡しき思慮と、不正の仕業とハ、
善き種子を害ずべき、雜草ニ同じけれバ、務めて、
これを引き拔くべし、
數多の、人ハ中にハ、學問、或ハ、他の職業を、勉強す

ることを頻りゐ、口ゐは唱ふれども、其實ハ、甚ざ怠惰ゐ〜て、何事をも、爲さゞるものあり、又諸事を、口ゐ辨ぜること、甚ざ寡ゐく〜て、大ゐ、其本業を、勉強せるものあり、即ち、前の如き人ハ、雜草の、ふべく後の如き人ハ、雜草なく〜て、愛ら〜き草木の乏〜き花園ゐ譬ふ

盛んゐ蔓りて、愛ら〜き草木を生ぜ〜めて、美〜き花を、開か〜むることを得ざるのみならず、既ゐ、其芽の、出さるときは、よく心を用ひて、これを養たざるべからず、然るども、雜草ハ、種子を蒔ゐざるとも、自ら芽を發せるものゐ〜て、自由ゐ生長せ〜むれハ、善き植物より、速ゐ蔓りて、これを枯れ〜むべ〜、故に、善き草木を、生長せ〜めんとすれバ、

木の盛んゐ、成長〜たる花園ゐ、譬ふべきものゐり、

凡そ、地の性ハ、惡〜からざるとも、善き種子を蒔ゐざれば、愛ら〜き草木を生ぜ〜めて、美〜き花を、開か〜むることを得ざるのみならず、既ゐ、其芽の、出さるときは、よく心を用ひて、これを養たざるべからず、然るども、雜草ハ、種子を蒔ゐざるとも、自ら芽を發せるものゐ〜て、自由ゐ生長せ〜むれハ、善き植物より、速ゐ蔓りて、これを枯れ〜むべ〜、故に、善き草木を、生長せ〜めんとすれバ、

務めて、雜草を拔き去るべし、
人の心も、亦此の如く、其元と善きものなれども、
不正の思慮ハ甚ゞ生し易きものなれバ、これを、
拔き去らずして、長せしむまバ、終ハ善き思慮の
發育を害し妨ぐるハ至るべし、
此故に、善き人と成らんことを希へバ、總ての、不
正の思慮を拔き去らざるを得ざること猶ほ、此人
ハ、雜草を、鋤き取るゞ如くなるを、要とするものな
り、

第十四

汝等、後よハ、利益ありと思ひても、自ら不正ハり
と、知る所の事、并ハ惡しゝと知る所の事ハ、決し
て、爲すべからず、又決して、虛言をべからず、若し、
是等に由りて、利益を得るとも、固より、不正の事
なれバ、終ハ、其身の害とハりて、爲めに艱み悲むべ
き、時日の來るものなれバなり、
凡そ、人ハ、常に、眞實を守るべきものなれば、汝等、
若し、自ら見聞し、或ハ、行ひたることを、人ハ語る
ときハ、よく、心を用ひて、其實狀のみを、話すべく、
又、他人より、聞き得さることを、人ハ語るときも、

同じく、其聞きさる、實狀を、話そのみにて、其談話を飾らんがため、其一分を變へ、又は新よ、自己の意を、添へ加ふる等のことハ、決して、爲るべからざ、

又、人ハ、戯れよも、虚言をべからざ、今、其一例を、擧けてこれを示さん、人の、戯をふ、少女等を、驚かしめんかさめ、彼等に向ひて、其事、實よあらざるに、汝の頸ふ、毛虫、止まとりと云ふか如き、虚言ハ、爲るべからぞ、汝等、若し戯れふも、此の如く、虚言をることあらハ、縱令、汝等が、實狀を語るときにても、

彼等、既ふ、其言を信ぜさるよ、至るべし、

爰ふ、童子と、狼とのことふ就きての、説話あり、汝等は、嘗て之を聞きたることありや、吾今、こを、語るべし、一人の童子ありて、狼の追ひ來ることふきに、狼よ、狼よと、高く叫びて、逃げ走る狀を、屢々、爲せり、これ、他人ふ、狼の實ふ追ひ來ることゝ、思ひしめ、これを、助けん爲めふ、走り來らしめて、彼等の、其場所よ來まるとき、狼の居らざるを、訝まる狀を見て、笑ひ樂めるなり、

此の如くして、屢々、他人を、欺きしが、或日、實ふ、狼

來れるゆへ、此童子も、眞ふ驚き恐れ、狼よ、狼よと、高く叫びて、逃げ走れり、然ともども、人皆、彼の言を例の詐欺なりと、思ひて、來り助けざりしゆへ、狼ハ、終ふ、彼を捕へて、噛み殺せりとぞ、

此說話も、服膺をべきものよて、平常虛言をるものは、縱令、眞實の事を語るときも、人皆、これを信ぜざるふ至ることを、示をものなり、

第十五

これも、如何なる場所なりや、○これも、書林の倉庫なり、○汝ハ、帽を冠りさる、人を見さりや、○彼ハ、何の爲めふ、此處ふ來りたるや、○彼ハ、善き書物を見出して、之を買ん爲めに、來りたるなり、○彼も、今、書物を見居るや、○否、彼も、机の片側ふ、腰を掛けたる、人を見居もり、○彼ハ、其人と對話せりや、○彼ハ、何を話し居るや、○彼も、其前ふ開

第十一課

第一

きたる書物を、善き書物と、思ひたるゆへ、これを買ん とて、其價を、問ひ居る所なり、○書物箱の前ゟ立ちたる人ハ、何を爲し居るや、○彼を出したる書物を、故の場所ゟ、入れんとする所なり、

此圖ゟ、畫ける少年ハ、手ふ持ちたる書物を讀みて、其中にある事を、少女ゟ語まる所ふり、○此少女ハ、心を用ひて、其講說を聞けりや、○然り、彼ハ、これを聞きて、よく考へ居る狀ふり、○彼少年の、語りたる所ハ、此書中の、甚ぞ緊要ハ部分ふるゆへ、此少女ハ、心を用ひ、謹みて、之を聞き居るふるべし、○此少女の顏ハ、少年の說話を聞き

て、喜ぐるが如し、○凡そ、人の顔色ハ、心の寫眞とも、謂ふべきものゝ如して、其心に、喜べること、怒とること、又、悲めることあるときハ、必ず、其情ゝ適へる狀を顯さゞることなし、○故に、人さるものハ常ゝ、其心を正しくし、殊ゝ他人ゝ對するときハ、務めて、其顔色を、柔和よくべし、

第二

汝ハ、遊び戯るゝ、小猫を好めりや、又、靜ゝ、踞まれるものを、好めりや、○汝ハ、小猫の、遊び戯るゝ狀を、見ることを、好むなるべし○若き獸類は、大抵

童子等の如く、遊ぶことを、好むものなり、○此小猫等の、紐と球とを、戯るゝを見よ、甚ぐ樂き狀なり、○猫は、其近傍ゝ、此の如き、戯るゝものなきときは、或ハ、自ら其尾ゝ戯れて、獨樂の如くゝ旋り、或ハ、他の猫と、相追ふて走り、又、互ゝ轉りて、遊ぶものなり、○犬も、亦、此の如き遊びを爲せり、

○汝ハ、小羊、駒、犢等の遊ぶを見たりや、○汝ハ其遊び戯るゝを見たることあるべし、○若き獸類の、戯れ遊ぶことは、屢々あれども、既に生長したる獸の、戯るゝことは、甚だ少なし、○老さる猫ハ其兒の遊び戯るゝ狀を見ることを、好めども、其身の上にて戯ることを嫌へり、○人も、亦然り、老人ハ、子女の戯れ娛む狀を、見ることを、好めども、其體に倚り、又は椅子に、衝き觸る等のことを、厭ふものなり、

第三

此童子ハ、學校に於て、善き生徒なりや、○然り、彼ハ、學校に於て、善き生徒なり、○汝ハ、彼の書物を、學ぶを見たりや、○否、吾ハ、彼の書物を學ぶを、見ざれども、彼の、讀む聲を聞けり、○彼は、學校に於て、字と畫とを習へりや、○然り、又、これを習へり、

○彼も、何の書物を、讀めりや、○彼ハ、第一讀本より、第四讀本までを、讀み了れりや、○彼ハ、第一と第二とを、讀

み了りて、今、第三讀本を讀めり、○吾も、彼の、よく書物を讀む聲を聞くことを喜べり、よく書物を讀めば、善き人と成ることを得べければ、○凡そ、人、さるものハ、才學あるべ、德なくとも、善き人と成ることを得べきや、○決して、善き人と、成ること、能ずず、況や、才學、德行、共にふき者は、他人の愛を受け、又、尊敬を受くることを得ざるものなり、

第四

爰に、遊歩に出で行ける、童子あり、○此童子ハ美

しき、衣服を着せり、○汝ハ、彼の衣服の料を、何ふりと思ふや、○吾は、糸織ふりと思ふ、○彼ハ、手に何を持てりや、○彼ハ、右の手ふ、轉かすべき環を持てり、○彼ハ、環を轉かし、遊ぶが爲めに、家を、出で行ける

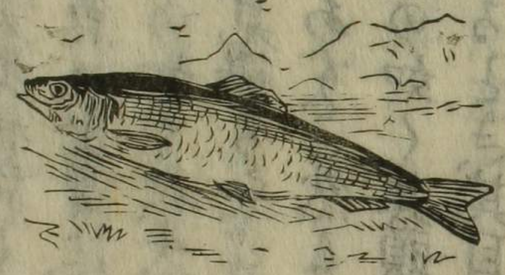
持ちて、左の手に、これを打つべき、棒を持てり、○

なり、○汝ハ、彼を、善き童子ふりと、思ふや、○吾ハ、これを、知らざるども、彼の、遊歩ふ出で行けるを、其母の、呼び

戻せるとき、快く歸り來らざれば、善き童子ふハ、あらざるべし、○汝ハ、此童子を、何年許ふりと、思ふや、○吾は、六七歳ふるべしと思ふ、○彼ハ、生長せる日にも、尚ほ、環を弄ぶことを、好むべきや、○吾ハ、今、之を知らざれども、只、彼の、遊戯のみを爲さず、能く書物を讀み、字を習ひ、又、算術を學びて、善き人と成らんことを望むふり、

第五

これハ、何ふりや、○これハ、魚ふり、○汝ハ、生きたる魚を見たることありや、○然り、これを見たることあり、○汝ハ、魚を捕へたること、ありや、○如何ふして、これを捕へたりや、○鉤と、糸とを、用ひたりや、又、網を用ひたりや、○吾は、鉤と、糸とを以て、魚を捕へたることあれども、網を以て、捕へさることなし、○魚ハ、常に、水中ふ住み、其鰭と尾とを用ひて、游泳をるものにして、水を離るれば、長く生活をること能



えび、○魚の、鰭と尾との形ハ、大抵、相同ドきや、○然り、大抵、相同ドけきども、唯、長短、廣狹の差別あり、○魚ハ、全身に、鱗ありや、○然り、然れども、其鱗ハ、鰭の如くに、大なるものあらず、○汝ハ、此魚の目を、見得るや、○魚ふハ、幾個の目ありや、○二つの目あり、○然らバ、他の目は、何處ふ在りや、○鳥の目の如く、其頭の、他側よ在り、○汝ハ、魚の、水中ふあるとき、其目ハ、物を見得ると、思ふや、○然り、○何よ由りて、魚の水中よて、物を見得ることを、知まりや、○若し、水中よて、見ること能ざされバ、

其魚ハ、必ず頭を、岩石ふ觸れしむべきに、其然らざるに由りて、これを知まるなり、○我等ハ、深く、水中に沈みても、よく、物を見ることを、得るや、○否、我等ハ、よく見ることを、得ざれども、魚ハ、甚ざよく見ることを、得るふり、○魚は、元來、水中ふ、生活をるものふれバ、其目の構造ハ、我等の目と、同ドからずして、水中よ於てよく見ることを、得れども、我等ハ、空氣中ふ生活をるゆへふ、空氣中に於てのみよく見ることを、得るものなり、

第六

此圖ハ、畫ける男子ハ、旅行せんとて、手ヲ皮匱を提げて、其家の戸口にある、階を降らんとし、女子ハ、おれを送りて、此處ヨ出で來り、互ヨ、別を告ぐる所ヲり、

男子ハ、女子ヲ向ひて、余、彼地ヨ到らバ、直ちに、書狀を以て、余の安否を、報ぜべし、余、彼地ヨ在りてハ、汝の、音信を聞く

を、甚ぞ樂めるゆへ、汝も、亦、書狀を以て、別後の安否を、細ヲ報ぜべしと云ひ、女子も、亦、男子に向ひて、離別の情を語まり、

汝は、此二人を、如何ヲるものと、思ふや、○此二人ハ、兄と妹ヨして、孤ヲり、孤とハ、幼年ヲして、父を喪ひたるものを云ふ、○故ヨ、此二人ハ、今、自ら其身を守り、其身を立てざるを得ざるヲり、

我等ハ、如何ヨ、遠き地方へ、此男子の行けるやを、知らず、又、如何ヲ久しく、他鄉ヲ滯在せるやを、知らざれども、此二人ハ、字を書き、又、之を讀むこと

を、知るゆへ、さとひ、久しく、相見ること能はざるとも、書狀を以て、互ひに、其安否を通ぜることを、得るなるべし、

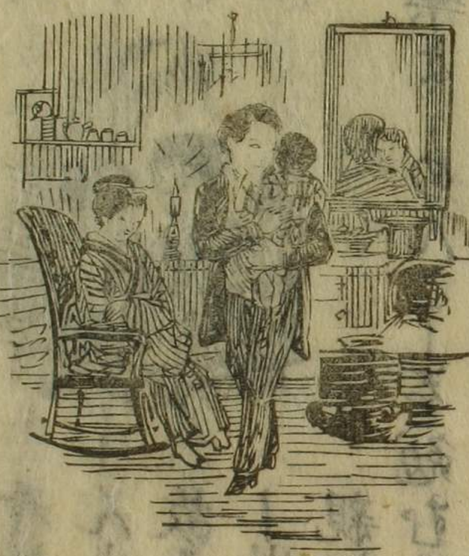
此二人、若し、字を書き、又、之を讀むこと能はざれば、互ひに安否を通ぜることを、得ざるして、其離住せる間は、如何ぞ、淋しかるべきや、○是故に、人さるものは、幼稚の時より、勉めて、字を書き、又、之を讀むことを學ばざるべからざるなり、

第七

此家は、甚だ、壯麗ふり、○汝は、此家の戸口に立てる人を、見たりや、○然り、一人は、男子にして、一人は女子ぶり、○其男子は、此馬に乘りて來りたるや、○彼は、何の爲めに、此處に來りさるや、○彼は、此女子の夫にして、今、家に歸り來まるなり、○此家の入口には、好き玄關ありて、その兩側に、美しき花あり、又、馬を繫きたる、墻の内には、廣き花園あり、

此處は、好き景色ならずや、○然り、好き景色なれども、此家に住める、人々は、今、幸福ならずして、常に、憂へ居るなり、○何故に、其人々は、鬱き憂ふるや、

○彼等ハ、其兒の、病氣あるを憂へ居るなり、○汝ハ、其病めるを見得るや、○其父ハ、今、彼を、抱き居るなり、○汝ハ、小兒の、足と頭とを見得るや、○吾ハ、其足と、項とを、見得れども、其顏を見ることを得ず、○然らハ、汝よく心を用ひて、此圖の總體を見よ、小兒の顏の、鏡ゐ映せ



るを、見るべし、○汝ハ、椅子ゐ腰を掛けたる女子を見得るや、○此女子を、誰なりと思ふや、○吾ハ、彼を、小兒の母なりと思ふ、○汝ハ、彼女子の、鬱き憂ふる狀を、見得るや、○彼ハ、常に、其小兒を愛せるゆへ、其全快せざるやを、氣遣いるなり、

此の如く、父母たるものハ、常に、其子の安全ふ一て、幸福ふらんことを、希ふゆへ、若し、其病めるときハ、殊ふ、諸事に意を用ひ、看護して、速よ、全快せしめんと、欲をるものふり、○是故よ、我等ハ、常に、兩親を、愛し敬ひて、これよ服事し、又、親切を盡して、其耳目等を、樂ましめんことを、勉むるハ、勿論、其老年に及びたるときハ、殊ふ、心を盡し、柔和よ、看護して、我幼稚の時より、受け得たる鴻恩ふ、報ぜざるべからざるなり、

第八

凡そ、人たるもの、他人と相交たるにハ、決して、虚言せず、常に、實事を語りて、親切を盡をべし、○然るときハ、人も、亦、汝を、愛をるゆへ、其身よ、幸福を來をべし、○汝は、虚言をることの、不正ふるを、知れりや、必ず、知まるならん、○既よ、話せし如く、虚言ハ、甚ず、惡くして、不正のことなり、○汝、若し、虚言をれバ、善き人ハ、老幼となく、男女とふく、皆、

汝を賤みて相交へらざるべし、○然るときハ、汝ハ、虚言して、如何ふる利益を得べきや、決して、僅の利益

ハ、多少の損害を來すべし、○又若し、虚言とれば、縱令、人より責を受けざるとも、自ら、其心に不快を抱きて、常にたのしからざるべけれバ、勉めて、其心を正くし、信實を守りて、他人の愛敬を受くべき善き人と成るべし、○汝、若し、過ちて、戸、障子等を破り、或ハ、美しき書物を裂き、或ハ、物を失ひ、又、机の上に、墨汁を覆ふ等の、如きことあらバ、これを隱さずして、直ちに父母、又ハ教師の前に行きて、其過ちを謝し、且つ、心に銘して、後日、再び、過たざる樣ふるべし、

第九

狐ハ、其性狡猾なるゆへ、諺に、狡猾ふるものを指して、狐の如く狡猾ふりし語を用ふ例へハ、猫の、甚ぞ狡猾ふるとき、彼猫ハ、狐の如くに、狡猾ふり

と、云ふが如し、○然るに、狐ハ、唯狡猾ふるのみならず、且つ、姦才あるゆへ、姦才ある人ハ、これを指して、彼ハ狐の如く、姦才ありと、云ふことあり、

爰ふ、狐の狡猾ふることに、就きては一話あり、今これを、汝等に、語るべし、○或時二匹の犬、狐を追ひ行き、て、殆んどこれを捕へんとするに至るとき、○此時、狐の

隱るべき場處ふく、唯、其近傍ふ、低き石塀あり、ゆへ、狐ハ、成るべく、速ら其方に、馳せ行けり、○然るに、犬ハ、次第に追ひ迫りて、狐の塀の處ふ、達したるとき、再び、これを捕へんとするふ至るとき、○此時、狐ハ、止むを、得ずして、其塀を跳ね超へふ、忽ち、一つの偽計を、案じて、成るべく、其塀の他側ふ、身を寄せて、潛みたり、○犬も、亦これを捕へんとて、速に、塀を跳ね超へされども、其餘勢、尚ほ盛なるゆへ、徒走して、狐を見失ひたり、○狐ハ、犬の塀を跳ね超へて、行き過ぎたるを

見るや、直ちに、其塀を超へ、戻りて、終ふ、其難を逃を得さりとぞ、○これ、狐ハ、其性狡猾ふるゝ爲め、犬を欺き得て、其命を助けさる、一證とぞべきなり、

第十

此圖ふ畫けるも、如何ふる場所ふりや、○これも、菓子屋の製作場なり、○左方に立ちたる、一人も、手に何を持ちて、何を爲ふ所ふりや、○彼ハ、左の手ふ、揑たる粉を持ち、右の手に、双物を持ちて、こまを切る所なり、○此揑粉ハ、何ふ用ひるものなりや、○これハ、菓子の外面を被ひ包むに用ひる

ものなり、○右方に、立ちたる、三人ハ、何を瞰め居るや、○彼等ハ、菓子を製るを、見て居まり、○菓子の種類ハ數多にして、圓く造るものあり、方に造るものあり、又、砂糖鹽或ハ、牛乳等を、混ぜるものありて、各、快美ふる味を、保てり、○汝ハ、臺の上ふ、如何なるものゝ、ある哉見

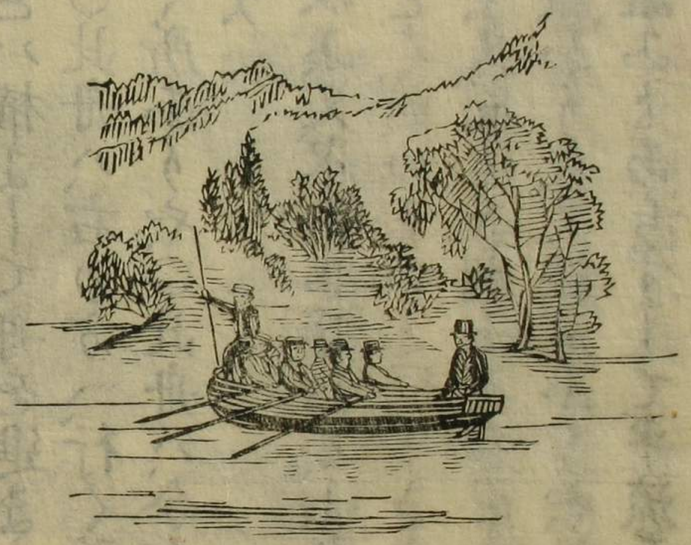
るや、○吾は、口ゝ栓を挿みたる、頸の長き瓶と、匕の入りたる壺とを、見る、○其他、此場所の中に、如何なるものありや、○菓子を燒く竈と、菓子を入るゝ器物あり、

第十一

此森の中に、湖あり、○汝ハ、其水を見得るや、○其水ハ、甚ざ穩よして、少ゝも、波たつことなふゝ、○汝ハ、此景色を、夏ふりと思ふや、又、冬なりと思ふや、○吾は、夏の景色ふりと思ふ、○何故ふ、夏ふりと思ふや、○若し、冬ふれた樹ふ葉ふく、又、地よ、草の生長するを、見ざるべきに、今、こゝを見るゆゑ、夏なりと、思ふなり、○汝ハ、樹の上よ、鳥の居るを見、又、湖の中ふ、魚の游ぐを、見るや、○我等ハ、今、鳥を見ることふく、又、魚を見ることなし、○たとひ、此湖ふ、魚類住めると、其深き處よ居るときは、これを見ること能ずず、○鴨ハ、靜水の上を、好める

ゆへ、此湖濱ふ在る、雜草の間ふ、住むふるべ、
爰に、又、森と湖との圖あり、○此湖ハ、前ふ畫ける
ものと、同じきや、○然り、同じき湖ふれども、前と
異ふる場所より、見
たる所なり、○汝ハ、
此湖ふ浮べる、小舟
を見得るや、○其舟
ふハ、幾人乘まりや、
○五人の男子、乘まり、○其中一人の、手

に持ちたる、長き棒の如きものは、何なりや、○こ
れハ、櫂ふして、舟を進ましむる爲めの、道具ふり、
○此舟ハ、右の方へ、行く所なりや、又、左の方へ、行
く所ふりや、○此舟ハ、今右の方へ、進み行く所ふ
り、
次ふ、又、水上ふ浮べる、小舟の圖あり、○此舟と、水
とも、前のものと、同じきや、○否、同じき舟ふあら
ず、又、同じき湖ふあらぢして、河ふり、○其河ハ、急
流ふりや、又、緩流ふりや、○否、緩流ふあらず、又、急
流ふもあらずして、平流ふり、○此舟ふハ、幾人乘



ふものハ幾人ありや、○舟の兩側ふ各三人あり、り組めりや、○此舟ハ八人乗り組めり、○彼等ハ、如何して舟を行かしむるや、○櫓を推して行かしむるや、○否、○棹を以て行かしむるや、○否、彼等ハ、櫂を以てこまを漕げり、○八人の中櫂を使

合せて六人ふり、○他の二人ハ、何を爲して居るや、○景色を眺めて居まり、○汝ハ、幾挺の櫂を見得るや、○吾ハ、三挺の櫂を見得まとも、他の三挺ハ、舟の彼ハ側ふあるゆへ、見ることを能ざるなり、

第十二

二人の朋友あり、或日、共ふ野ふ行きて、樹陰の堤の上に座まを、○此堤ふ雜草の生長して、樹の葉の、茂れるを見まを、今夏ふり、○二人ハ、何を爲して居るや、○一人ハ、右の手を、地上ふ置き、左の手に、

書物を開きて、讀み、他の一人も、心を用ひて、これを聞き、甚だ樂める狀ふり、○汝ハ、何よ由りて、彼の樂めることを、知れるや、○彼の顏ふ、其樂める徵ありや、○然り、人の顏色ハ、其心よ從ひて、變じるものゆへ、吾は彼の顏色よ由りて、其樂めることを、知れり、○此の如く、

心と顏色とハ、互に、相關をるゆへ、其心よ、發をる所の情ハ、必ず、顏色よ顯れざることなし、○故よ、人たるもの、他人と相交へるに當り、顏色を爽らならしむるにハ、常よ、其心を、正しくすべきふり、

小學讀本卷之五終

明治十五年五月廿日版權免許
同　年十月出版

纂譯人　東京府士族　宇田川準一
東京西小川町二丁目七番地

出版　三重熊本根室縣御用書肆
文學社
東京本町四丁目十六番地

見分